



Title	「勢語諸本考」「塩尻考」「合衆国考」補遺
Author(s)	宮澤, 俊雅
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 117, 83-91
Issue Date	2005-11-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/34099">http://hdl.handle.net/2115/34099</a>
Type	bulletin (article)
File Information	117_PR83-91.pdf



[Instructions for use](#)

「勢語諸本考」「塩尻考」「合衆国考」補遺

宮澤俊雅

本稿は、本紀要に掲載した

一〇六号 二〇〇二年2月 「伊勢物語百廿五段本諸本の親疎関係」

一〇七号 二〇〇二年8月 「塩尻」覚書——伊勢物語九段「なりはしほじり」考——」

一〇九号 二〇〇三年2月 「US漢号」覚書——「合衆国」考——」

の補遺である。いずれも退隠間近ゆえに急いだところがあり、かなりの遺漏があるので、その若干をここに纏めておく。

一 伊勢物語百二十五段本諸本の親疎関係補遺

前稿で示した諸本の親疎関係は、異文分布の状況を分析して確定したものであって、単なる意見や憶測を提示した  
ものではない。従って前稿以後の時点で、伊勢物語百二十五段本諸本について論ずる場合には、前稿の内容に従うか、

あるいは前稿の内容を否定実証するか、のいずれかの方向を採るべきであつて、前稿の内容を理解出来ないまま、それを無視し、いたずらに前稿の示し得た親疎関係と異なる意見や憶測を提示するのは、真の学徒の採るべき道ではない。

本追考においては、前稿以前に公刊された資料・論考で、前稿で割愛した二・三の事柄を採り上げて、前稿以後の論説のあり方の一端を示しておく。

前稿では二一本の諸本を採り上げたが、今回は、前稿の時点で既に本文内容が公刊されていた次の三本を追加する。

22 正徹本Ⅱ片桐洋一伊勢物語古注釈書コレクション正徹自署・蜷川智蘊筆本……「伊勢物語正徹自署・蜷川智蘊筆」  
(片桐洋一編伊勢物語古注釈書コレクション第一巻、一九九九年3月、和泉書院)

23 成蹊本Ⅱ大阪成蹊女子短期大学蔵本……久保田孝夫「翻刻 大阪成蹊女子短期大学蔵『伊勢物語』」(大阪成蹊女子短期大学研究紀要第36号、二〇〇一年3月)

24 二松本Ⅱ二松学舎大学附属図書館蔵源重孝享保年間書写本……菅根順之「二松学舎大学本『伊勢物語』」(二松学舎大学論集 第四十五号、二〇〇二年2月)

これらの各本が既に提示された諸本の親疎関係の中どの位置に定位されるかを見るには、まず天福本・武田本のグループに入るかどうかを判断するのが有効である。そこで該三本と、天福本・武田本は取り敢えず学習院天福本・静嘉武田本を、他は陽明本・九大為家本・文暦本・鉄心承久本・千葉本あたりまでを採り上げ、学習院天福本を起点

とし、千葉本を終点とした関係距離表を提示すれば表1のようになる。正徹本・成蹊本・二松本がいずれも天福本・武田本のグループであることは明らかである。

次に三本のグループ内での位置を見るために、学習院天福本を起点とし、陽明本を終点とした関係距離表を提示すれば表2のようになる。正徹本は武田本寄りの位置から分岐し、二松本・成蹊本は嵯峨本に近い位置から分岐している。以上の結果から、天福本・武田本グループの諸本は、おおまかに分ければ

天福本型 学習院天福本・御所本・九大細川本

嵯峨本型 嵯峨本・井上兼良本・二松本・成蹊本

統秋本型 東海統秋本・北大本・東海兼邦本・正徹本

武田本型 静嘉武田本・尊鎮本・陽明本・東海承久本・永青兼良本

の四類になるが、この類別は書承の系統に基づくものではなく、嵯峨本型・統秋本型は多分に天福本・武田本の混淆書写に基づいている。

今後は、天福・武田系各本の諸本関係の定位には、他の本との比較に多大の労力がかかったとしても、その調査の過程ではなく、結果のみ（例えば嵯峨本型であるとか）を報告すれば良く、まして翻刻・影印等による全本文提示は必須要項ではなくなっている。

このグループの本は天福本と武田本の両翼を主要諸本とする一つの伝本として他の本と比較すべきであって、決し

て他の各諸本の諸本関係の定位のために天福本と武田本の二本を基準本に設定すべきではない。

片桐洋一「伊勢物語諸本集一解題」(天理図書館善本叢書と書之部第三卷『伊勢物語諸本集一』一九七三年1月、天理大学出版部)は天理為家本・千葉本・文暦本の定位に、天福本・武田本の二本を基準本に設定している。

為家本については、天福本または武田本と異なる本文一七二条を掲げている。その一覧表から整理集計すると

〔独自異文〕 天福本 一九例 武田本 二〇例 為家本一三〇例 〔鼎立異文〕 三例

となる。要するに三本の関係は、天福本と武田本が極めて近似し、為家本は両本とは隔け離れていることが分かるだけである。片桐氏は、さらに為家本の独自異文のうち「明らかな誤写」一六例と、「助詞」の「は」無表記の一二例を「低次元の」「どうしようもないもの」として削除する。結果

〔独自異文〕 天福本 一九例 武田本 二〇例 為家本一〇二例 〔鼎立異文〕 三例

と、為家本と天福・武田本との懸隔を縮めている。それ以後の記述は論理を辿れない。

千葉本については、天福本または武田本と異なる本文一一六条を掲げている。その一覧表から整理集計すると

〔独自異文〕 天福本 二二例 武田本 一八例 千葉本 七六例 〔鼎立異文〕 ナシ

となり、為家本と比べると千葉本と天福・武田本の懸隔は半分強である。片桐氏はここでも低次の一六例を削除し

〔独自異文〕 天福本 二二例 武田本 一八例 千葉本 五〇例 〔鼎立異文〕 ナシ

と位置付ける。

文暦本については、天福本または武田本と異なる本文五八条を掲げている。その一覧表から整理集計すると

〔独自異文〕 天福本 二六例 武田本 一三例 文暦本 一九例 〔鼎立異文〕 ナシ

伊勢物語百廿五段本諸本の  
関係距離表

表 1

	学習院天福本	天理千葉本	本線距離	支線距離
学習院天福本	0	112	0	0
二松学舎本	77	74	115	39
大阪成蹊本	96	82	126	66
正徹本	115	73	154	76
陽明本	127	84	155	99
静嘉武田本	122	76	158	86
九大為家本	111	60	163	59
天理文暦本	137	82	167	107
鉄心承久本	150	86	176	124
天理千葉本	112	0	224	0

表 2

	学習院天福本	陽明本	本線距離	支線距離
学習院天福本	0	72	0	0
御所本	4	75	1	7
九大細川本	8	74	6	10
井上兼良本	41	92	21	61
二松学舎本	46	94	24	68
嵯峨本	22	64	30	14
大阪成蹊本	82	120	34	130
東海統秋本	50	73	49	51
北大本	60	81	51	69
東海兼邦本	115	129	58	172
正徹本	64	75	61	67
永青兼良本	58	65	65	51
東海承久本	59	66	65	53
静嘉武田本	69	65	76	62
尊鎮本	64	59	77	51
陽明本	72	0	144	0

表 3

	静嘉武田本	専大寂身本	本線距離	支線距離
静嘉武田本	0	450	0	0
天理文暦本	49	445	54	44
天理千葉本	97	465	82	112
天理為家本	212	312	350	74
専大寂身本	450	0	900	0

となり、三本の間では天福本が最も懸隔甚だしいことは明らかである。片桐氏はここでも文暦本の六例を低次と見ており、結果

「独自異文」 天福本 二六例 武田本 一三例 文暦本 一三例 「鼎立異文」 ナシ

と位置付ける。そして各三本と天福・武田二本の対比をしながら五本相互の関係についてまでは考え及んでいない。見て分かる通り、為家本↓千葉本↓文暦本と、天福・武田本との懸隔が縮まるほど、天福本の独自異文の比が高くなる。これは武田本型諸本が、天福本型諸本と天福・武田系以外の諸本との接点となっているためである。天福・武田系以外の諸本の諸本関係を定位するには、武田本との比較を行えば、天福本との比較をする必要はないのである。ここでは天福本をはずし、天理為家本と共通異文が相応に見られる専大寂身本を加え五本の本文異同を数え、静嘉武田本を起点とし専大本を終点とした距離関係を示しておく(表3)。

## 二 「しほじり」考補遺

「しほじり」については前稿以前に徳原茂美「伊勢物語の「しほじり」をめぐる近世期の言説」(武庫川女子大学紀要 人文社会科学編第44巻 1996 一九九七年3月)があり前稿で言及参照すべきであったが、徳原氏の論考が「しほじり」の本義の究明よりも、天野信景の『塩尻』に関わる研究を中心にしており、前稿で安易に引用・言及しては氏の論考の普及を妨げるものと考え、敢て参照・言及をしなかつた。その後徳原氏は「随筆『塩尻』命名の由来」(解釈 二〇〇二年10月)を著わしており、氏の意図する所も広まったと思われるので、ここでは氏の論考をも踏まえて前稿の補正をしるしておく。

徳原氏の論考では

「しほじり」を鹹砂の山としたのは天野信景が最初ではなく、人見必大の『本朝食鑑』(一六九七)が先行すること、

両説とも「しほじり」塩水を含んだ砂を山のように積み上げたもの」であつて「砂を山のように積み上げて塩水をかけたもの」ではないこと、

『了普古今序注』(一四〇六)に「海士ノシホタル、其スナヲ、タレハテ、後ウチコホスヲハシホシリ(シホリシリ)トナン云フ」(海民が製塩のため潮水を汲みかける砂山を、汲みかけ終つて打ちくずす、その砂

山を「しほじり」と言うのである」とあり、中世に「しほじり」を「砂を山に積んでそれに塩水をかけたもの」とする説があったこと、

大槻文彦が『大言海』の「本書編纂に当りて」で混同したため、天野信景が「しほじり＝砂を山のように積み上げて塩水をかけたもの」という説を唱えたという言説が広まったこと、

が述べられている。

右のうち『了誉古今序注』の「海士ノシホタル、其スナヲ、タレハテ、後ウチコホスヲハシホシリ（シホリシリ）トナン云フ」は「海民が塩を垂らすその鹹砂を、骸砂になった後でその辺にうっちゃっておくものを、「絞り尻」と言うのである」と解すべきである。ここには砂塚はまだ出現していない。『伊勢物語集注』とともに、「骸砂の山」そのものが都人士の「しほじり」期待の作り出した幻影かもしれない。

### 三 「合衆国」考補遺

前稿においては、退隱の時期も迫り時間的に完全稿が危ぶまれたため、私の手に余る領域に関わるいくつかの事柄について、推測・憶説を述べるにとどめ、あるいは詳細を究めぬままにしておいた所がある。

前稿では、「合衆国」の語が、初めての米華交渉である望厦条約のときに定められたUSの正式漢訳語であろうと推測したが、幸いにしてこのことは既に実証論考が書かれていた。川島真「「合衆国」再考——中国文献に依拠して——」



（比較史・比較教育研究会編『黒船と日清戦争——歴史認識をめぐる対話——』一九九六年3月、未来社）がその論考で、前稿の時点で見いだし得なかったことには恥じ入らざるを得ない。川島氏の論考によれば、やはり条約締結以前の公文書類には「合衆国」の語はなく、一八四四年の望厦条約締結時にUSA側の漢文テキスト作成過程で「合衆国」が正式な訳語として採用されたとのことである。

また、前稿では、「合衆国」の用語は黒船とともに我が国に齎されたと推測したが、それ以前とされるオランダ風説書や出版書目に見られる「合衆国」についての考証は行わなかった。風説書は多く謄本として伝わっており、幕府に収められた正本の字面を確定するのはかなり難しく、また、出版書目も初刷り本の確定が非常な手間である。川島氏の論考にも

日本に「合衆国」という訳語が伝わったのは、ペリー来航以前である。例えば『蛮語箋（改正増補版）』（謙塾、嘉永元年（一八四八年））には、「フルエーニグデ・スターテン（ユナイテッド・ステイツ）」の訳語として「合衆国」が挙げられている。

とあり、にわかになこれを黒船渡来以後の埋木訂正であるかどうか判断することはできない。しかしまた、このような若干の黒船以前の「合衆国」用例があったとしても、そこから「合衆国」の語が普及したとは考えられず、川島氏の言うように「ペリーがその漢文テキストを江戸幕府の役人に手渡したことから日米和親条約でも「合衆国」が正式の国名として採用され」て広まったことは間違いなさであろう。

「合衆」の語義については、今後多くの用例が見いだされるであろうから、その上で論がなされるであろう。仏典では「和合衆」の意で使われることが多いようだが、「複数のものを集めて一つにする」という意味でも使われているようである。

「合州国が正しい」という主張は、USが自らの名としている「合衆国」を日本人の勝手な思い込みで難じているものであり、この種の主張が一九四五年以前にあったとしても簡単に圧殺されたであろうが、戦後民主化の言論の自由のもとでは、その筋からの接触は穏やかだったようである。青芳勝久氏の『アメリカ合衆国史』は、内容量から見ても当初上中下三巻の予定であったことは間違いないであろう。それが上巻が出て半年後に下巻に相当する内容を最終章の僅か一章分に、上巻での「合州国」主張とは裏腹に「合衆国」を多用して、上下二巻で終らせている。本多勝一氏は『アメリカ合州国』単行の際に、序文に「この機会にと、近代訳語にくわしい広田栄太郎教授に検討をお願いした結果を、巻末に掲載しておきました」「私としては、日本語として定着した「合衆国」を「合州国」に変更してやろうといった野心があるわけではなく」と、既に身を引き気味である。そして〈第七刷からの追記〉で、斎藤毅氏の「政府のある省からのレファレンス質問」を、「外務省もまた国会図書館の調査局に問い合わせた」と明かしている。本多氏が「正式論文」と称した斎藤氏の文は最初から「合州国とするのは間違い」という「結論」をもって書かれたもので、語志研究論文の体をなしていない。それでも「合州国」説を沈静化させれば十分だったようである。斎藤論文が知られている割りには、この時期に真摯に取り組んだ増田富寿氏の論は知られることがなかったようである。九〇年代の「合州国」説は高島俊男氏の見当はずれがこれを沈静化し、「当局」の出る幕はなかったようだ。しかしこれによって再度、真摯に取り組んだ論者が埋もれることのないように願ってやまない。